

『週刊金曜日』の7月1日号に『画家は時代の傍観者でよいのか』と題して、日本の戦争責任とアジア侵略を支えた民衆の加害責任を問い続けた富山妙子氏の訴えたかったこととして、同志であった五島昌子氏が語った記事を掲載していた。五島氏は富山氏を下記のように評している。富山氏は戦前、戦中、戦後の目撃者として、天皇制が日本をダメにした元凶だという固い信念を持っていた。画壇、文壇、音楽界でも、評価されだすと天皇や皇室の権威に近づいていく人は多い。そういう人には「感覚的な拒否反応」を起こしてしまう人であった。また、芸術とは何かを問い、「生き様をさしおいて一体何を芸術とよぼう」と訴え、芸術が金持ちを喜ばせる装飾品やカタルシスになることを断固、拒否した。時代の傍観者であり得ない自分の思想性を大胆に絵画で表現し続けた。富山氏に関心を持ち、彼女の自伝『アジアを抱く 画家人生記憶と夢』を読んだ。

『アジアを抱く』は「わたしの人生の始まりと終わりに戦争があった」と書き出している。富山氏は、1921年神戸郊外の御影で生まれた。幼い時から、日本、西洋文化に触れて育った。実業家であった父に連れられて、満州に行き、女学生時代をハルビンで過ごしている。そこでは、多くの外国人を見、関りを持っている。画家を目指し、女子美術学校に進学する。時代は戦争に向かい、文化は戦時統制を受けるようになる。富山氏は多感な若い時、権力が横暴に振舞う時代の風潮を敏感に嗅ぎ取っている。この時代に、画家としての心象風景が形造られたようだ。

敗戦を、疎開していた長野県で迎え、時代は一変していった。富山氏は二人の子どもを抱え、極貧の生活を強いられた。そして、人々は戦争と戦後の苦労は語るが、侵略戦争を反省しない風潮に疑問を持ち、被害を受けたアジアに関心を向けていく。また、家庭での男女の関係、更に、画壇の女性差別に疑問を持つようになる。宮城県の細倉垂鉛鉱山との出会いが、彼女の人生を決定づけた。抗夫たちの過酷な労働と公害被害を知り、鉱山を絵にした作品を描く。そのことがきっかけで、北海道の炭鉱地帯に行き、九州の炭鉱地帯にも行く。朝鮮休戦協定が調印される頃から、石炭の需要は激変し、炭鉱の労使関係の争議は命がけの闘争となる。富山氏は、10年留まって、炭鉱の闇の世界を描き続ける。

炭鉱が破綻し、抗夫たちは南米に向かった。富山氏も、彼らを追って、南米に向かう。『追われゆく抗夫たち』を著した上野英信氏と同じ道を辿っている。南米に向かう船上で、また、ブラジル、キューバ、メキシコのラテンアメリカを経験し、西欧の植民地支配の残酷さと、今なお残る傷跡を痛感する。富山氏は、更に、インドを体験する。インドでは、「穢れた者」とされた人々への差別が生き続けている現実も見た。帰国後、多くの知識人と交わり、現実認識と思想を深めていく。それは、「あらゆる思想は権力と結びついたときから腐敗の道を辿ってゆく」という思想への深化ではないか。

1970年、金芝河という若い詩人が、韓国政府に対し痛烈な政治風刺の詩を発表して逮捕されたというニュースが報じられ、その詩人の存在に突き動かされて韓国行きを決断した。私も、金芝河の『苦行 獄中におけるわが闘い』を読み、権力と対峙する気迫に圧倒され、韓国の「民衆（ミンジュン）神学」を読み続けた。富山氏は韓国に行き、ハルビンの女学生時代の同窓生たちと会う。彼女たちの人生から、日本の植民地政策と朝鮮戦争によって、痛めつけられた残酷な生活を聞く。富山氏が「あなたはどんなに苦しい思いをしたでしょう、わたしは日本人として心からおわびします」と言うと、「友だちは別よ、お互いに国

境は忘れましょう」と答えた。彼女たちが日本から受けた傷跡は、癒やされることはない。富山氏の韓国行きを知った新教出版社の森岡巖氏から、宗教哲学者の池明観氏を紹介された。何の知識もないまま、池氏を訪ね、反体制知識人の格調高い日本語と静かな語らいに魅せられてしまった。池氏は下記のように語られた。「数年前、わたしはK C I A（韓国中央情報部）に検挙されたとき言いました。『殺すなら殺して下さい。私はキリスト教徒だから天国にゆけます。もしわたしが死んだら、いまは平凡な息子ですが、父の死の意味をはじめて知って、もっと激しい抵抗に立ち上がるでしょう。わたしの死は多くのキリスト教徒をふたたび目覚めさせることになるでしょう。』… わたしは十字架を選んできました。日本の知識人も国家権力によって痛めつけられた歴史はわたしたちと共通でしょうが、権力の犬もとの『天皇制批判』は表面に現れませんね。かつて日本が不幸を与えた中国、朝鮮、ベトナム、その他のアジア諸国のことを考えてもらいたい。経済進出の場としての面ではなく、倫理的な要請として考えることが日本に課せられた責任ではないでしょうか。」私も、池氏の知性には魅せられ、アジアについて多くを学んだ。

京都生まれの在日韓国人の徐勝氏がソウル大学院生であった時、北朝鮮の職員と疑われ、逮捕され、拷問の苦しさに耐え兼ね、ストーブに抱き着き、自殺を図って、顔に火傷を受けた。富山氏は、徐氏の裁判の傍聴にも行くように求められた。韓国の検察局はなかなか面会許可を出さなかったが、帰国の飛行機を予約した時、突然面会が許された。徐氏に元気になられ、火傷の回復を祈っていると告げると、「わたしはここに入ってはじめて日本のみなさんの友情を知りました。ぼくのために心を痛めて下さった友人や先輩の方たちの気持ちが本当にありがたいと思います」と応じられた。

金芝河氏は、裁判で死刑の求刑を受けた時、「光栄です」と叫んだ。死刑判決に対し、国際的な救援活動が始まり、軍事政権は無期懲役に減刑した。富山氏たちは、「金芝河の死刑を阻止する伝道の旅」を実行している。韓国の光州では、戒厳令撤廃と民主化を求める叫びが街頭に溢れ出たが、強力な軍隊によって、血まみれの街と化した。富山氏は、金芝河氏の詩から「しばられた手の祈り」、光州事件から「光州のピエタ」のリトグラフを描いている。富山氏は、権力で人間の尊厳を奪う出来事と女性への蔑視に視点が集中している。朝鮮人強制連行、従軍慰安婦、生物兵器の研究・開発を行った 731 部隊など多様である。鉱山を描いたことから始まり、様々な事件にのめり込んで、多様な手法で絵画化して、世界で展示会、個展を開いている。富山氏は「わたしは西洋中心の美術に疑問をもちながら、アジアの表現を探してきた。同様に男性中心の美術の世界で、女性の表現を考えてきた」と言っている。「アジアと女性解放—私たちの宣言」を結成した時、松井やよりや社会党の土井たか子元党首の秘書であった五島昌子など、7人の呼びかけ人の筆頭に「富山妙子」の名前がある。富山氏は自分の芸術について下記のように書いている。「画家にとって『美しいものの追求』など、とっくに終わっていた。何を基準に『美』とするのか。20世紀の美術において『美』は、すっかり多様化してしまった。人々はさまざまな『美』を抱いている。しかし、20世紀になっても美術史学者や美術界は女性アートを無視しつづけていた。女性画家には『女らしさ』が求められる。『女流画家』とは、泥まみれの現実を美しい幻影に変える『女の感性』として男たちは受け入れるのか。私は『女流』という困り込みに抵抗を感じ、炭鉱から第三世界、韓国の政治犯の詩などに心を寄せ、近代が引きずる陰ばかりを描いてきた。」彼女の働きはこれに集約しているのではないか。